

下にまけりし石なる事をまゝりぬ、大和へのかよひもこゝにありてこそ宜しくもおぼゆれば、これうつなく宇治橋の古跡なり、上島下島といふ名も宇治橋の上下なりし故の名にやと、かたがたより所ありておぼゆ、

因云、橋本の西葛葉の下に、上島下島といふ二村あり、うたがふらくは、いにしへ山崎橋の上下にありけるが、山崎のわたりはすべて豊太閤の時にいたくかはりしかば、此二村も所はうつりて、名のみ傳はりたるにや、

〔廣隆寺來由記〕粵稽廣隆事跡推古天皇十二年甲子秋八月太子德聖語良臣秦川勝曰、吾前夜夢、此去北十餘里、至一勝地、中川勝拜稽曰、臣食邑與夢相符、早須歷覽太子唯々命駕、川勝欣然前導、此夕宿泉河濱、略越翌日屆免途、橋川勝眷屬等、各獻調膳於太子、其侍從臣及輿僮等二百餘人皆悉飽食太子大悅、

〔日本書紀二十七〕九年五月、童謠曰、子知波志能、都梅能阿素弭爾、伊堤麻栖古多麻提能、伊鞞能野鞞古能度理、伊提麻志能、俱伊播阿羅珥茹、伍提麻西古多麻提鞞能、野鞞古能度理、

〔釋日本紀二十八〕于知波志能字治橋也

〔日本靈異記上〕人畜所履觸體救收示靈表而現報緣第十二

高麗學生道登者、元興寺沙門也、出自山背惠滿之家、而往大化二年丙午、營宇治橋、

〔續日本紀文武〕四年三月己未、道照和尚物化、天皇甚悼惜之、遣使即弔賻之、和尚河內國丹比郡人也、

俗姓船連、父惠釋少錦下、中於後周遊天下、路傍穿井、諸津濟處儲船造橋、乃山背國宇治橋和尚之所創建者也、

〔續日本紀考證〕扶桑略記引宇治橋銘作道堂、案此以道昭周遊四方、天下諸津濟處儲船造橋、又道昭道登共元興寺僧、而名亦相涉、誤認爲道昭也、如編年記所云、二僧勦力則石銘豈特記道登哉、